

伊波小通信4

発行：石嶺 聡 NO.4 令和元年7月3日(水)

大人の視力が子どもを育てる

「見る」という言葉から派生する言葉には、実にたくさんものがあります。たとえば、「見出す」「見抜く」「見破る」「見透かす」「見守る」「見届ける」など、さらには「見落とす」「見逃す」「見放す」「見捨てる」など、あげればきりがありません。

親として、教師として、子どもを育てるとなると、前者のように子どもの良さを「見出す」、ずるさや嘘を「見抜く」「見破る」、そして、ときにはじっと子どもを「見守る」、あるいは子どもにさせたことをきちんと「見届ける」などのことが大切になるでしょう。

これが後者のように、子どもの良さや子どもの抱えている悩みを「見落とす」「見逃す」では困りますし、場合によっては子どもを「見限る」「見放す」「見捨てる」となると、もうどうにもならなくなってしまいます。

こうしてみると、親として自分の子どもをどう見るか、教師として自分のクラスの子とや授業で接する子どもをどう見るかということは、子どもの成長に大きくかかわってきていることがわかります。つまり、子どもを取り巻く周囲の大人達の子どもを見る目・子どもに注ぐまなざし次第で、その成長は大きく違ってくるように思うのです。大切なことは、親としての視力、教師としての視力をどう高めることができるかだと思います。※視力(子どもを見て取る力)

7月に入り、子ども達にとって1学期の学習や生活のまとめの月になりました。まとめの取り組みは、子ども達だけが対象となるのではなく、私たち大人(親・教師)も、どうしたら子どもを育てるのによりよい視力を持つようになるかという課題(まとめ)に取り組む必要があるのではないかと考えます。

この課題は私たち大人の夏休みの宿題として取り組む価値あるものだと思います。子育ては大切です。共に頑張っていきましょう。

長い目で見守る

ながいめでみまもる

親

親という漢字には「木の上に立ち、見届(みとど)ける」という意味があるそうです。